様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 1 日現在

機関番号：35306
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20730437
研究課題名（和文）屋内と屋外の様々な遊び場所における幼児の環境認知と仲間関係の発達

研究課題名（英文）Child’s environmental cognition and peer relations in indoor and outdoor preschool settings

研究代表者
廣瀬　聡弥（HIROSE TOSHIYA）
美作大学・生活科学部・准教授
研究者番号：40419461

研究成果の概要（和文）：幼稚園における屋内と屋外の様々な遊び場所において，幼児の会話を含めた行動を連続的に観察した。その結果，遊び行動は場面の物理的環境特性によるものだけではなく，場面の変化といった他の要因の影響も受けていることがわかった。また，屋外場面における仲間関係において，遊びの対象物が同じ種類であるか否かが重要であり，それが屋内と屋外の仲間関係の違いを生じさせていた。つまり，対象物の類似性が仲間関係において重要であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：This study examined the correspondence between indoor and outdoor play in children’s daily life.　It was investigated whether children maintained the tendency to engage in a particular type of play, irrespective of the environment, or whether they changed the type of play according to the environment in order to seek novelty.　The results indicate that children do not maintain fixed play behavior without taking into consideration the situation; on the contrary, their play changes greatly in accordance with the play setting.　Furthermore, for each age group there is a qualitative difference in the change, which is based on the setting.　Therefore, it is important for children’s facilities to have several different play settings so as to bring about changes in the children’s play behavior.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：幼児，遊び，仲間関係，環境認知，対象物，発達，物理的環境，相互作用

１．研究開始当初の背景

(1)子どもを取り巻く環境

近年，身近に存在していた子どもの遊び場が大幅に減少し(蒲原，2005)，また，安全上の問題から子ども同士で様々な場所で自由に遊ぶことは難しい。つまり，以前は地域の様々な遊び場において，自然と接し，子ども同士で関わり合いながら多様な遊びを行う機会があったが，現在はそのような機会が奪

われている。このような社会状況の中で，保育所や幼稚園などの施設がどのような遊び場を子どもに提供するのか，そして遊び場が子どもの行動にどのような影響を与えるのかを明らかにすることが，ますます重要になっている。しかし，遊び場としての環境が子どもの遊びや仲間関係に与える影響について実証的に検討している研究は少ない(Davies, 1996)。子どもの遊びは日常の様々な場面の中で生じ，突然始まったりあっけなく終わったりするという特徴を持っている。既存の遊び研究では，場面を統制することによって少しでも遊びの変化性・変容性という特徴を排除しようと試みた。しかし，他児との関わりを含めた遊びは，様々な文脈の中で生じる。遊び場において，子どもがどのように行動を選択し調節しているかを調べることは，遊びや仲間関係を知るうえで，また，保育所や幼稚園の様々な場の持つ役割を知るうえで必要になっている。

(2)保育所や幼稚園における遊び場と遊び

保育所や幼稚園の遊び場は，幼児にとってどのような役割があるのであろうか。日本の多くの保育所や幼稚園の特徴は，子どもが自由に使用することができる様々な種類のおもちゃや固定遊具が存在する。屋内の保育室ではままごとや絵本などの遊びのために区切ったコーナーと呼ばれる場所が存在し，屋外では砂場や滑り台といった固定遊具などが存在する(中沢，1996)。屋内と屋外の遊び場は，幼児の発達的・教育的視点から重要性が指摘されているが，屋内におけるものが多く屋外のものは少ない(Naylor, 1985)。屋内の研究として，幼児は，ままごとコーナーにおいて他児と関わりながらごっこ遊びを行い，ブロックコーナーにおいて平行的な構成遊びを行うなど，幼児は場所によって遊びを変えていることが報告されている(Pellegrini, 1984)。一方，屋外の研究は，主に身体運動という視点で行動を解釈し，その重要性を指摘するにとどまるものが多い(e.g., Fjortoft, 2001)。

(3)幼稚園における屋内・外の遊びと仲間関係

幼稚園の屋内と屋外において，幼児がどのような遊びを行っているのかについて観察を行った(廣瀬・日野林・南，2007)。その結果，屋内では言語を用いたコミュニケーションが遊びを規定し，一方，屋外では固定遊具が身体的遊びを規定するものであった。しかし，屋外では身体的遊び以外にも構成遊びなどの様々な遊びが生起し，それらを促すものとして砂や土などの素材があった。つまり，遊びを遊びの種類，幼児の社会的な状態，そして遊びの対象物から捉えた場合，各側面が動的に関連して屋内と屋外の遊びを特徴づけていることがわかった。

また，遊び相手の選択について，幼児期では近接性が最も重要であり(Epstein, 1989)，偶然そばにいたという偶発的な相互交渉により遊び相手が選択されるため，その他の遊び相手の選択要因である同年齢性や類似性と比較して，環境の影響を受けやすいと考えられる。つまり，上述の屋内と屋外において異なる遊びが生起するということは，遊び相手についても影響を及ぼすと考えられる。そこで，幼稚園の屋内と屋外において，幼児が誰と関わりを持っていたのかについて調べた結果，幼稚園の施設内で成員が同じであるにも関わらず，屋内ではある特定の相手と関わりを持ち，屋外では多様な相手と関わりを持つことが明らかとなった(廣瀬・志澤・日野林・南，2006)。屋外は，屋内とは異なる様々な遊び相手と接する機会を与え，それが屋内とは異なる公共性といった社会的能力の発達を促す可能性が示唆された。

それでは，屋内と屋外のどのような特徴により，遊び相手の違いが生じたのであろうか。遊びが異なること，そして遊び相手が異なることは，屋内と屋外の様々な特徴を持った遊び場所が関連していると考えられる。そこで，屋内と屋外にある遊び場所を細かく分類し，幼児の活動や社会的状態から各場所の特徴について調べた(廣瀬，2007)。その結果，3歳児にとっては他児と共有することのできる対象物が存在し，かつ相手を留めておけるような環境や，5歳児にとっては屋外の各場所に共通する特徴(例えば，土や砂などの素材)が相互交渉を促し，さらに屋外では屋内であまり関わらない相手と関わりを持つことが示唆された。

２．研究の目的

以上の研究は，各場所において生起した遊びや社会的状態について示したものであり，幼児が他児と関わる際に各場所がどのような影響を与えたのかについては，具体的に明らかになっていない。ゆえに屋内と屋外のどのような特徴により遊び相手の違いが生じたのかについては，依然，問題として残る。そのためには，遊び場における遊びや仲間関係について，幼児は遊び場やそこにある対象物をどのように捉えているのか，あるいは遊び場の連続性という視点が必要である。

そこで本研究は，幼稚園における屋内場面と屋外場面，さらにはその中に様々な要素を持つ遊び場所や対象物について幼児がどのように認知し利用しているのかを明らかにすることにより，屋内と屋外で遊び相手が異なる要因，さらには様々な特徴を有する環境が幼児の遊びや仲間関係の発達に及ぼす影

響を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は，幼稚園に在籍する幼児を対象とし，デジタルビデオカメラを用いて観察した。また，各遊び場所に固定デジタルビデオカメラを設置し，幼児の会話や行動についてのデータを収集した。

観察場面は，幼稚園の園舎内(以下，屋内)，及び園庭(以下，屋外)において行った。幼稚園において幼児が揃う自由遊び時間のうち，屋内の自由遊びは 9：00〜10：00，屋外の自由遊びは 12：30〜13：30 であるため，屋内と屋外の観察はこの時間帯に実施した。この自由遊び場面中に，幼稚園の教諭あるいは観察者から幼児への働きかけはなかった。

観察手続きについては，まず，撮影を行う前に予め観察対象児を決め，屋内と屋外の観察を同じ日に行った。観察者は，対象児の周囲が映るようにデジタルビデオカメラを構え，対象児の遊びや他児との関わりなどが後から見てわかるように時々位置を変え，対象児と約 3m の距離をおいて撮影を行った。また，観察対象児の撮影と同時に，各遊び場所に幼児の会話を録音することができるようにワイヤレスマイクを設置し，約 3m 離れた場所に三脚を立てデジタルビデオカメラを設置し，ワイヤレスマイクの音声を受信するとともに各遊び場所において生起する遊びの様子や社会的状態を撮影した。

映像データをコンピュータに入力し，遊び場所，他児との社会的状態，発話や会話の内容，そして幼児同士の対象物の関連について分析した。

４．研究成果

(1)幼児の遊び場面と遊びの関連

遊び場面の変化により各児の遊び行動の傾向が保持されるのか，それとも場面により異なる新奇性を求めるために，遊び行動が関連を持って変動するのかについて検証した。

主成分分析の結果，「興味の主体」「社会的関与」「場への関わり」という 3 つの信頼できる主成分が得られた。3 歳児については，「興味の主体」に関する主成分得点のプロットから，屋内では機能的な遊びを行うが，屋外では構成的な遊びを行う幼児がおり，他方でその逆の変動を示す幼児がいた。しかし，「社会的関与」に関する主成分得点のプロットから，場面の変化によって変動する幼児は少なかった。一方，5 歳児については，「興味の主体」に関する主成分得点のプロットから，場面の変化によって変動する幼児は少なかった。「社会的関与」に関する主成分得点のプロットから，屋内では他児との関わりを重視した遊びを行うが，屋外では個人的な活動を重視する遊びを行う幼児がおり，他方でその逆の変動を示す幼児がいた。

この結果を検証するために検定を行った(Table1)。まず，主成分得点の変化量を屋内と屋外の主成分得点の差の絶対値とした。主成分×年齢×性の分散分析の結果，主成分×年齢の交互作用が有意であった。下位検定の結果，第一主成分において，3 歳児の変化量が 5 歳児より有意に大きかった。一方，第二主成分において，5 歳児の変化量が 3 歳児より有意に大きかった。第三主成分においては年齢に有意な差が見られなかった。次に，主成分ごとの比較では，5 歳児において第二主成分の変化量が第一主成分より有意に多かった。

Table 1 Change of the component score in 3- and 5-year olds.

Age group	Component		
	1	2	3
3 - year olds	1.36 (0.84)	0.94 (0.87)	1.36 (0.84)
5 - year olds	0.81 (0.67)	1.66 (0.92)	1.24 (0.82)

Note: Data presented as mean (standad deviation).

屋内と屋外の遊び行動は，遊び場面の持つ物理的環境特性によるものだけではなく，遊び場面の変化といった他の要因の影響も受けていることがわかった。そのような子どもの特徴は，子どもの発達にとって重要な役割を果たすと考えられる。つまり，様々な特徴を有する場面やその変化に伴って，子どもは多様な活動や経験をし，認知・社会的発達を促すことが期待できる。したがって，幼稚園や保育所などにおいて多様な遊び場面の存在，そして場面の変化が幼児の発達にとって重要であることがわかった。

(2)対象物が幼児の社会的関わりに及ぼす影響

対象児と他児の所有する対象物との関連が相互交渉へ影響を及ぼしたのかを調べ，遊び場面における遊び相手の違いを生み出す要因と発達的変化について検討した。

屋内場面では同じあるいは同種の対象物を持っている場合，近接から相互交渉，または相互交渉から近接へと移行することが多いが，異なる対象物を持っている場合および対象物を持っていない場合についても，それぞれ近接から相互交渉，または相互交渉から近接への移行が見られた。一方，屋外場面では，近接から相互交渉，または相互交渉から近接への移行の大半が，他児と同じあるいは同種の対象物を用いた場合であった。

本研究より，同じあるいは同じ種類の対象物を操作することが，相互交渉が成立するうえで重要であり，屋外場面はそのような対象

物が多数存在するために，幼児が多様な相手と関わりを持つ機会が得られた。そして，物理的文脈に任せた他児との関わりは，環境の影響を受けやすい低年齢の子どもだけではなく，高年齢の子どもにとっても有効であることがわかった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
①廣瀬聡弥 遊びを測る(1)．小児歯科臨床，査読無，14，pp.83-88．2009.
②廣瀬聡弥 遊びを測る(2)．小児歯科臨床，査読無，14，pp.75-81．2009.
③廣瀬聡弥 遊びと環境(1)．小児歯科臨床，査読無，14，pp.69-75．2009.
④廣瀬聡弥 遊びと環境(2)．小児歯科臨床，査読無，15，pp.61-68．2010.
⑤廣瀬聡弥 遊びと仲間(1)．小児歯科臨床，査読無，15，pp.81-86．2010.
⑥廣瀬聡弥 遊びと仲間(2)．小児歯科臨床，査読無，15，pp.73-80．2010.
⑦廣瀬聡弥・山田芳明 幼稚園と小学校の教師が持つ保育･授業観とその形成 −幼小接続のための相互理解に向けて−．美作大学・美作大学短期大学部紀要，査読無，56，pp.22-33．2011.

〔学会発表〕（計６件）
①廣瀬聡弥 幼稚園の保育と小学校の授業に対する印象の相違,指導の相違．全国図画工作・美術教育研究大会，2008.8．於 大阪教育大学附属平野小学校・附属幼稚園
②廣瀬聡弥・日野林俊彦・南徹弘 対象物が幼児の社会的関わりに及ぼす影響.日本心理学会第72回大会，2008.9．於 北海道大学
③緒方佑次・廣瀬聡弥 葛藤場面における 4 歳児の主張行動と親密性の関係．日本心理学会第73回大会，2009.8．於 立命館大学
④廣瀬聡弥 動物園見学が幼児の興味・関心に与える影響．日本心理学会第 73 回大会，2009.8．於 立命館大学
⑤廣瀬聡弥 動物園見学における幼児の興味･関心の変化と諸要因の連関．日本心理学会第 74 回大会，2010.9．於 大阪大学
⑥廣瀬聡弥 遊び場面の移行に伴う幼児の遊び行動の変化．日本心理学会第 75 回大会，2011.9．於 日本大学(予定)

６．研究組織

(1)研究代表者
廣瀬　聡弥（HIROSE TOSHIYA）
美作大学・生活科学部・准教授
研究者番号：40419461

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：